日本の印象を語る座談会[[1]](#footnote-1)

三日間にわたる大東文学者大會は戰時下における大東の文人の使命を議し、その實をくひ和やかな雰氣のうちに會議を終、ひきつゞき六日はケおよび土海軍空隊を見學してわが海のなる飛行にしたが、本社は當夜、一行のうち古丁（滿洲）和正華（古）丁丁（中）の氏をき、日本の林、山光郎、張文の氏とともに日本問の印をはじめ心おきなきの一夕を過ごした。【寫眞は座談會】

まづ第一に感服　　進んだ農耕の技術

多賀本社學藝部長　　大東亞文學者會議が皆さんの熱誠なる御討議によつて豫期以上の好成績を納めて終了したことは、まことに御同慶のいたりに堪へません、引續き本日からは各方面の見學に移られたのでありますが、今夕は短時日ながら皆さんが文學者として特有の見地からご覧になつた戦時下日本の諸様相をまとめて「日本の印象」といふ題下に率直な御感想をおもらし下されば幸甚に存じます。まづ丁丁さんから順にお願ひいたします。

丁丁氏　　わが中國は人口の八は農民がめてゐる農業國家であり、從つて農業は重大なので、まづそれについての見をべたいと思ひます。長崎着とともに、その他をまはり、一般日本の農民生活を見學しました。中國の原野はほんたうに原野のまゝで、開されてゐない所が多いのに、日本は山に至るまで開されてゐて、しかも非常に進んだをもつて開をしてゐる。これが第一の好印でした。

眞の日本の姿　　國民錬成大會の感激

和正華　　私は日本の婦女子の生活をぜひ見學したいと思つてをりましたが、実際にそれを見て、日本の女性が勤勉で如何に努力してゐるかといふことを知り、たのもしい印象を受けました。東京についてから、明治神宮の國民成大會にみ、天皇、皇后両陛下の行幸啓を拜し、一同としておへ申上ました。その張、更に万を奉唱する時のは、まつたく我々が今までしたことのなかつたでした。

　もう一つは運動場内の非常に整然としてゐることに感心しました。中國の從來の運動會は非常に混雑してをりますが、日本の場合は一つの競技が済んでその次に移る場合には、そこにはゴミ一つ落ちてゐないし、道具も整然として、人も落ち着いてゐる。実に訓練されてゐます。

運動は國民錬成の精髄ですから、これを通じて私は日本のほんたうの姿が見られたやうな感じがします。

今日はケの海軍空隊を見學しましたけれどもが廣大で、しかもすべてがされてゐるを見て、非常にしました。

日本の飛行學生の技術、その整然たる訓練は、まつたく初めて見た私たちにとつて、大きな驚きであり、非常に力強く、感じた次第です。日本が精神的に勝れてゐるのみならず、世界の新知識を吸収し、さらに新しい創造を行つてゐるといふことが実によくわかりました。

東京はじめ各地で見た日本人の生活、文學者大會や種の會に出してじたことは、日本人の神が非常に勝れてゐること、國体が世無比であること、更に文學が非常に進んでゐること。この三つの結を得たのであります。これによつて世の新知が造せられ、世界の新が進されるのであることをハツキリと確信しました。

私たちは故郷に帰りこの点を中國人に傳へ、東亞共栄圏建設の責任を分擔してゆけるやうに努力したいと思つてをります。

古丁氏　　僕が日本をれたのは、これで四回目ですが、今回特に印的だつたのは、國民成大會にくも天皇、皇后兩陛下の行幸啓仰ぎ奉り、私達もともに聖の萬を奉唱申上げることが出來たことであります、これは実に印的でにたへないところでした。永く私の記にるものだと思ひます。

　それと同時に銃後における國民の生活が、心の力をもつて物の無いのに打ち克つてる、さういふ氣がいたします。これは銃後における國民組織の徹底によるものであると思ひます。

和正華氏　　こちらへ來る前には、日本は大戰爭をやつてゐるから生活は相當だらうと思つて、國を出る時からそれが非常に氣にかゝつてをりました、ところが、來てみると、それは少しもじられません、生活もいはゆる安居樂業してゐるし、國民生活は豊で、國民神といふものは大戰爭をやつてをれば必ずくなつてるはずなのに、それも少しも感じられません、これは私にとつては非常なと心強さです。

林房雄氏　　遠慮のないところ、悪口を言つてくださいよ。

丁丁氏　　私はかういふことをじました。支那事が起つてから中國では、日本人といふものは非常に残であるといふふうに思つてゐたんです。ところが自分たちが和平運動を起して、先生といつしよにへ出て來て、更に日本の人達と交する會も得まして、初めて日本人の道義心のいこと、博、信義、さういふ氣質がハツキリつたんです。

林氏　　初めて日本に來て、どうしてもかういふ習慣は諒解できないというやうなことはありませんか。

丁丁氏　　中國では今一列運動をやつてゐますがその行列に並ぶ時に中國の民は日本人が俺たちを待するんだ、さういふじを持つてるらしいんです。そのせゐか、は非常に紊れてゐます。ところが日本へ來てみると日本でも一列をつくつてゐる。決して待でも何でもないといふことがよくりました。

林氏　　日本人は強制せられないでチヤンと行列をやつてるからね。

丁丁氏　　少しも不な様子がないので心しました。次に私は三つのをじた。一つは六百尺以上の高い山に田植をしてゐること、第二は、八製鉄所の大きさにいた、もう一つは、アメリカの飛行がに來るかと、ひそかに心してをつた。ところが來て見ると、そんな氣は少しもない。（笑聲）（1942年11月7日）

日本的な風格　　舞踊・料理にも潤ひ

本社　　昨夜和正華さんは支那料理の招宴で「これは、おいしい日本料理だ」と笑はれたさうですが……

丁丁氏　　日本の支那料理は風といふか、風といふか、さういふところがふ。それから日本で食ふ洋食は日本料理のうまさにはおよばないですね。

本社　　先夜の本社の招宴で「猩々」といふ踊をごらんになりましたが日本の踊はいかゞですか。

張文環氏　　西洋のの線は非常にあらはで、体に近くつてゐるけれども、日本のりは着物で隠して線を出さない。だから日本のりは潤ひがあつて、非常になんです。

林氏　　僕は丁丁さんの本を二冊いたゞいたのですけれども、それは非常に値段が高いのですよ。日本円でちやうど五十銭くらいで出來るのが二円五十銭です。

丁丁氏　　日本から來る紙が高くなつてゐるのと、中支の方は軍が五倍になつてゐるから、向ふの一円五十銭が日本の内地から申すと三十銭です。新聞紙が事前は一月二円八十銭であつたものが今二百円ださうです。八十倍になつてゐる。なんかでも、日本の改造のやうなものでも、せいぜい二十銭であつたのですが。それが非常に高くなつた。

和正華氏　　日本の女の人の手はきれいですね。中國の女は太くてきれいでないけれども……。

丁丁氏　　中國では、特に田舎では風呂に入らない。一生に二回半入るといはれてゐます。一回は生まれた時、半分は結婚の時、この時は完全に入らない。最後は死んだ時です。

　日本では嬶天下といふ言があるさうですが、中國では（家内をれる）といふ言があるのです。特に人なんかに嬶天下が非常に流行つてゐるのですが、日本ではどうですか。

林氏　　嬶天下とか、尻に敷かれた亭主なんてものがあつたら、日本では世間の物笑いになるんですよ。支那の本を讀むと、嬶天下の抗議がたくさん出て來るので、実に驚いたのですが、さういふことがずゐぶんあるらしい。ほんたうかどうか知らないけれども、嬶天下の典型的なものは宋美齢だといふふうに傳はつてゐるのであゝいふ女が日本では一番嫌はれるんですよ。

素直な日本人の心　　研究すべき古來の日本文化

張文環　　私は今度からこつちへ來る前は、東京は張してゐない、さういふ非めいたことをよく聞かされたのです。ところが來て見ると、東京はこれでいゝのです。東京の市民があまり張しすぎたら、今度はのはうが慌て出すでせう。だから東京はこれでいゝんぢやないかと思ふのです。

本社　　日本の文學者の著書を御覧になつてをつて、その方に今度実際に逢はれて、違ふ感じを受けたといふやうなことはございませんか。

丁丁氏　　菊池さんの書かれたものを讀してゐたのですがあの人の表現がで、あゝいふ人とは思ひませんでしたが、會つて見ると非常にお婆さんみたいなじで、ゆつたりした和な大家でした。

香山光郎　　林先生にちよつと申上げたいのですけれども私は中華民國や滿洲國の方と下関でおちあひましてね[、]それで私は非常に注意深い眼で、甚だ失禮ですけれども皆さんの動静を見てをりますと、なんだか多少わだかまりのあるやうな氣がいたしました。

それがこんどの大會においてうけた印は今までの私のへは解であつたので非常にひだと思ひます。ことに昨日を出された時の先生のな度を見まして私はかしくなりました。みな日本と一つになつて戰ふ氣持にえてゐるといふことをはつきり看取りまして非常に喜んでをります。

諸先生も短い間に日本のよいところをよくご覧になつたやうではありますが、それがみなだと思はないで、日本はそんなに簡單にわかるものではない、明晰な皆さんの頭で研究していたゞきたいといふことを一つお願ひしたいのです。

日本人はちやうど林さんのやうな開けつ放しな人間だと思へば間ひない。門が二つない、一つ門を入れば、すぐの間になつてしまふやうな、非常に正直な人間である。だから日本人の言ふことを、その直にお受取になれば決して、しくじりはないといふことをこゝで申上げたいと思ふ。

もう一つお願ひがあります。それは私の経験から申上げるので、日本は過去千餘年中國の文化を非常に熱心に勉強しました。先日もどなたか仰つてをられましたが、その報いとしまして、今度は中華民國の方が日本文化をそれだけの熱心さをもつて勉強していたゞけば、それは必ず中華民國のためになると思ふのです。

美しい信頼感で　　互いに心と心の語らひ

本社　　林さん最後に一つ……。

林氏　　私はさき朝、滿洲、中國にまゐりまして、なんでも少し長くゐなければいかんと思ひまして事情の許す限り長くゐて、そこで一つの僕流の結みたやうなものを持つたのです。

　それは[、]これまで東洋の問題は日本と中國といふ事に要約されますが、今まで兩國民はあまりお互の缺点ばかり探し過ぎて、日本の中國研究を見ましても、たゞ如何に中國人といふものは悪い狡い、あるひは單なる享樂的民族であるとか、さういふ研究だけしか日本に知られてゐないのです。

　これはもう十分だから、今度は一つおに長所ばかりすといふ運動は起らなくても、おれはをすことは人に任せるから、おれは中國の長所ばかり探ぐるぞといふやうなことを日本で言しようといふやうな、そんな氣持になつたのです。

　さういふ氣持にさせてくれのは、結局明治維新の研究であり續いて明治の歴史と滿洲建國を研究したことも非常に役立つたのですが、そのうちで西郷隆盛というふやうな人は、もし日支親善といふやうなものを本當に行はうと思つたら日本人が中國人になつてしまつて、中國のうちから道徳の國にすればよいんぢやないか、と言つてゐるのですが、かういふことに非常に感心して歸つて來たのです。

　今度の大東文學者大會の場合でも、菊池さんの、あの立な度にも見えるやうに、あの人であると同時に、あの後にどこまでも各國の大東民を信用し信し、場合によつてはして行かうといふ日本文學者の決が現れてをつた。その結果僕等にしては有いやうな大會を持つことが出來た。

　私はそのまゝに話すのですが、始める前は、これはとに角顔を合せるだけでもよいんだ、くらゐにわれわれ文學者は思つてをつた。ところが文學者が思つてゐる以上の、あるひは政府が思つてゐる以上の効果があげられた。

　それは申すまでもなく大東戰爭下に開かれ、天皇陛下の御稜威に歸することになるのです。けれども、しかし文學者といふものが大會のに當つたその度がこのよい結果を生んだのだらうと思つてをります。（終）（1942年11月18日）

1. 『朝日新聞』1942年11月7日と8日に掲載。座談会は11月6日に銀座のアラスカで開催されたことが「三京印象記」によりわかる。 [↑](#footnote-ref-1)